

「幸いに生きるために」
ルカによる福音書 14 章 25-35 節

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」(26 節)。思わず耳を疑ってしまう言葉です。およそイエスさまが言われたこととは、とても信じられません。

私たちは、ここで使われている「愛する」と「憎む」という言葉の意味を理解しておく必要があります。通常、「愛する」「憎む」という言葉は、感情的要素が深く関わっている言葉です。しかし、聖書の中では「愛する」と「憎む」は別の意味でも使われています。それは「選択」という意味においてです。ここで言う「愛する」とは「選ぶ」ことです。それに対して「憎む」とは、「選ばない」ことです。イエスさまは、ここで何を優先するかという意味で、「愛する」という言葉と「憎む」という言葉を使っているのです。つまり、イエスさまがここで教えておられるのは、第一に、イエス・キリストを愛して生きるということなのです。

また 33 節の「自分の持ち物を一切捨てないならば」という教えも、「憎む」と同じような使われ方をしています。自分の持ち物を一切捨てなさいというのは、文字通りそうしなさいという話ではありません。自分の持ち物というのは、言ってみれば私たちが頼りにしているものです。それらはこの世を生きていくためには必要なものです。それがなければ、私たちは生活することは出来ません。しかし、ここでイエスさまが語っていることは、それまで自分が執着していたもの、これが無くては生きていけないと思っていたものから一度手を離して、まずイエスさまに頼りなさい。神さまの恵みにすがり、依り頼む者となることをイエスさまは求めておられるのです。

私たちに救いをもたらしてくれるのは誰でしょうか。両親でしょうか。伴侶でしょうか。兄弟でしょうか。友人でしょうか。イエス・キリストでしょう。私たちの信仰を支えてくれるのは何でしょうか。財産でしょうか。地位や名誉でしょうか。実績とプライドでしょうか。イエス・キリストでしょう。

そのイエスさまは、「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」(27 節)と言われました。ここで言われている「自分の十字架」とは何でしょうか。この十字架は、人生の苦しみとか、我が身に起こったつらい出来事などではありません。私たちは、そのような人生の重荷と十字架とを混同してはなりません。

また、「自分の十字架を背負って」というのも、イエスさまが十字架を背負われたように、私たちもイエスさまと同じように歩めというわけではありません。殉教者たちのように迫害に耐えろとか言うのでもありません。自己犠牲に生きろと言われるのでもありません。結果的にそうなることはあっても、それは決して強いられてするものではありません。私たちの信仰の歩みは、悲壮感漂うものではないのです。それはイエスさまが望まれることではありません。

イエスさまがどうして私たちに代わって十字架の道を歩んでくださったのか。それは、私たちに幸せになってほしいからです。悲しみの人生ではなく喜びの人生を送ってもらいたいからです。そのためにイエスさまは十字架の道を歩まれたのです。

私たちが自分の命を本当にかげがえのないものとして大切にしていけることができるのは、それが神さまの恵みによって与えられたものであり、神さまの独り子であるイエスさまが、ご自分の命

を身代わりにしてまで大切に思ったださっていることを知ることによってです。イエス・キリストが、私たちの命を心から愛し、私たちのための贖いとなってくださった。この主イエスを信じ、愛し、依り頼んで生きる所には、人間の力や思いを超えた慰めと励まし、平安が与えられます。その慰め、励まし、平安の中でこそ私たちは、与えられている命を大切に生き抜いていくことができるのです。

また私たちは自分の家族を、どんなに愛し、大切にしている、自分の力で家族を救うことはできないし、支え切ることもできません。愛する者の命が、例えば病によって失われていくことを私たちはどうすることもできないのです。確かに、私たちは家族によって支えられ、慰められ、励まされます。けれどもその家族を本当に支え、守っていく力は、私たちの中には無いと言わなければなりません。

しかし私たちが、主イエス・キリストを信じ、愛し、従い、依り頼んでいく時に、イエスさまが私も、私の家族をも愛していただき、永遠の命の約束を与えてくださっていることを知らされます。そして、この主イエスの救いの恵みの中で、その恵みに支えられて、私たちは、様々な人間の罪にもかかわらず、自分の家族を本当に愛し、大切にしていけることができます。イエス・キリストこそを愛するのは、キリストの愛に支えられてこそ家族を本当に愛することができるからです。

そのようにして私たちは、この社会において、「地の塩」として立てられているのです。先に天に召されたお一人お一人は、その歩みの中で地の塩として神さまを証ししてこられました。私たちもこの方々の足跡に倣う者でありたいと願います。